岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

PRESS RELEASE

令和 6 年 11 月 27 日

医療系学生における HPV ワクチンの接種率・施策の認知率などを調査
～性別・学年・専攻による違いと、接種・忌避の理由が明らかに～

◆発表のポイント

・医療系学生（医学部、歯学部、薬学部）を対象に、HPV ワクチン接種歴と接種予定、積極的ワクチン接種勧奨施策の認識等について、アンケート調査を実施しました。

・女子学生の接種率は 55.6%と一般集団より高く、施策の認知率も全体的に高値でした。一方で、男子学生では接種率は低値であったものの、高学年ほど施策の認知率が上昇していました。

・接種行動には本人と親の意思が大きく関与し、他のワクチン接種や勉学・転居等による接種日程調整の困難性も挙げられ、教育啓発活動の継続と接種機会の確保が必要と考えられました。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医）の神辺まどか大学院生、岡山大学病院総合内科・総合診療科の大塚勇輝助教、同大学病院感染症内科の萩谷英大准教授らの研究グループは、ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種歴と接種予定、積極的ワクチン接種勧奨の再開への認識などについてアンケート調査を行い、一般集団に比した医療系学生の性別、学年、専攻分野ごとの差異について明らかにしました。これらの研究成果は 11 月 5 日に日本感染症学会の英文誌である「*Journal of Infection and Chemotherapy*」に Original Article として掲載されました。

子宮頸がんの発症を予防できる HPV ワクチンは、副作用への懸念から一時積極的接種勧奨が中止されていたものの因果関係は証明されないとして勧奨・定期接種が再開され、キャッチアップ接種も促進されています。しかし依然として本邦におけるワクチン接種率は低く、これが子宮頸がん発症率の高さとの関与が示唆されています。

今まで各個人が有する HPV ワクチン接種歴や認識・知識と、ワクチン接種行動に対する理由との関連性は不明でした。本研究を通じて、将来的なワクチン接種の担い手でありワクチンの有効性について発信する側ともなる医療系学生の接種・忌避の状況やその理由について明らかになったことで、今後のアウトリーチ活動と医学教育を考える契機になることが期待されます。

◆研究者からのひとこと

自分自身がまさにキャッチアップ世代であり、子宮頸がんワクチンの接種方針におけるメディアの報道や政府の動向に大きく影響を受けました。今回の研究を通して対象世代の認識を知るとともに、アンケートを通して接種対象者としての接種行動を後押しし、医療従事者として適切な情報入手につながってほしいと考えております。

神辺 大学院生

若者を対象にHPVワクチンについて正しい情報の発信を試みる学生団体もあるなど、医療系学生の知識・認識・行動は本邦のワクチン接種状況を改善するうえで重要な鍵になると思います。その状況や要因を調査・分析できたことはワクチン政策や現場での配慮について考える一助になりそうです。

大塚 助教

子宮頸がんワクチンの公費助成制度は2025年3月末で終了予定となっています。若い女性のがんを少しでも減らすために、一人でも多くの方にワクチン接種を受けていただきたいと思います。

萩谷 准教授

■発表内容

＜現状＞

HPV ワクチンは子宮頸がんの発症を予防できる方法として医学的に証明され先進各国において高いワクチン接種率を有します。日本でも 2013 年に小学校 6 年生～高校 1 年生相当の女性を対象とした定期接種が開始されましたが、副反応への懸念からすぐに政府当局によって積極的勧奨が中止されました。ワクチン接種と有害事象の因果関係が医学的に証明されなかったことも踏まえ 2022 年 4 月に積極的勧奨の再開、2023 年 4 月に定期接種の再開がなされていますが、依然として本邦におけるワクチン接種率は低くこれが子宮頸がん発症率の上昇につながっていると考えられます。当局は勧奨中止期間の若年女性に対するキャッチアップ接種を促進していますが、各個人が有する接種歴や認識・知識と HPV ワクチンを接種ないし忌避する理由との関連などは不明でした。

＜研究成果の内容＞

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医）の神辺まどか大学院生、岡山大学病院総合内科・総合診療科の大塚勇輝助教、同感染症内科の萩谷英大准教授らの研究グループは、岡山市内の 2,567 人の医療系学生（医学部、歯学部、薬学部）を対象に、ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種歴と接種予定、積極的ワクチン接種勧奨の再開への認識などについて、ウェブアンケート調査を行いました。2023 年 7 月 7 日から 31 日までの期間に、男性 181 人、女性 739 人を含む 933 人（36.3%）から回答が得られました。女子学生全体でのワクチン接種率は 55.6%で、専攻別にみると医学部医学科（73.8%）の学生でより高い接種率がみられました。政府当局のワクチン接種推奨の中止と再開に対する認識は、女子学生ではどの学年でも高かった一方で、男子学生では高学年の方が高いという結果でした。女子学生の半数以上（54.7%）は、両親のアドバイスに基づいてワクチン接種を受けたと回答しました。ワクチン未接種だが将来の予防接種に関心がある学生の理由としては、副作用への懸念（47.4%）とワクチン接種スケジュール調整の難しさ（29.1%）が挙げられました。

＜社会的な意義＞

一般集団に比した医療系学生のワクチンリテラシーの高さや医学教育の効果を反映したものと思われましたが、特に男子学生においては接種率も認知率・知識も低迷・不良であり、諸外国に比して本邦の HPV ワクチン政策の遅れが浮き彫りとなったと考えています。ワクチン忌避の理由として、本人の意向だけでなく親の意向に基づいた接種控えが存在していることや、医療系学生特有の他のワクチン接種のタイミングあるいは勉学・転居などのイベントと重複することに起因した接種スケジュール調整の難しさが抽出されました。この結果が今後のアウトリーチ活動や医学教育を考える契機となりうると考えられます。

■論文情報

論 文 名：Human Papillomavirus Vaccination Awareness and Uptake among Healthcare Students in Japan
掲 載 紙：*Journal of Infection and Chemotherapy*
著　　者：Madoka Shimbe, Yuki Otsuka, Hideharu Hagiya, Yoichi Yamada, Fumio Otsuka
D　O　I：https://doi.org/10.1016/j.jiac.2024.11.004
U　R　L：https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S1341321X24003015

＜お問い合わせ＞
岡山大学病院　総合内科・総合診療科
　助教　大塚勇輝
岡山大学病院　感染症内科
　准教授　萩谷英大
（電話番号）086-235-7342　（FAX）086-235-7345

岡山大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています